

ねそ

白川郷荻町集落の自然環境を守る会 発行 平成19年 1月号

「三村交流会」及び「白川郷・五箇山を考えるシンポジウム」開催

去る12月2日、五箇山相倉合掌集落ふるさとセンターを会場に見出しの会が開催されました。シンポジウムでは、東京大学大学院西村幸夫教授の基調講演及び各地区代表者によるパネルディスカッションが行われ、世界遺産を守る意義や3地域の抱える問題を共有する場をもつことができました。そこで今回は、基調講演の内容と3地域から出された意見の要旨を掲載いたします。

「世界遺産集落のこれから」基調講演要旨

世界遺産の意味

世界遺産の起源は、99年前のハーグ条約にはじまる。これは文化財地域に旗を掲げ、その地を一切戦争に活用しないことを示すことで、文化財を攻撃の対象としないことを決めた条約である。赤十字の文化財版といえる。これにより、第一次世界大戦でパリやローマが戦争の被害から免れてきた。

世界遺産誕生の直接の出来事は、60年のエジプトのアブシンベル神殿がダム建設によって湖中に沈む事件である。これをユネスコが主導し世界に募金を募り守ったのである。当時エジプトとフランスは戦争をしていたが、フランスは多額の資金を支援した。これは「動かせる物は博物館に入れて保存し、動かさない物は守らない」という考えはおかしい」という考えにたったからである。

世界遺産誕生後の事例としては、回教とキリスト教による内戦で文化の象徴である橋が壊されたが、それを復元して遺産登録した例などがある。では、これらをなぜ守るのだろうか。それは、世界遺産そのものが「世界の宝」であり、国境を越え今日に生きる世界の人々が共有し、次の世代に受け継いでいくべき貴重な宝だからである。保存が第一であり、観光は二の次である。

集落が世界遺産となることの問題点と解決策

中国のある世界遺産地区では、バッファゾーンの外に建設されたビルが、景観をそこねている事例がある。また、中国リジャンの旧市街では、遺産は守られているのだが、観光化が進み元々の住人である少数民族が移住してしまい固有の絵文字文化がなくなりつつある地区もある。その他世界遺産地区の隣に大きな都市が出没したり、土産物店が景観をそこねたりしている地区が世界にみられる。その地域の生活文化も遺産であり、その地ならではの土産を開発して売る努力が大事ではないか。

日本が観光立国をめざすのであれば、遺産の保存と観光の在り方を考えた対策を考えていかねばならない。熊野古道の高野山では、日本の文化を知っていただくターゲットを欧州に絞り規制を強化することでクオリティー（品質）を高めている。アメリカのインディアン集落では、テーマパーク的に入場料を取り地元の人がガイドを行うとともに、夜はお客をシャットアウトすることで自分たちの生活を守っている。これも一つの方策である。

白川郷・五箇山が進むべき方向

日本の世界遺産及び暫定リストをみると、神社仏閣等の文化財とはちがう視点から沖縄や白川・五箇山が選ばれている。これは日本の文化を広く世界に知らせる観点から、伝統的集落の代表選手として選ばれたのである。沖縄は沖縄独自の文化。アイヌ文化は、残念ながら文化財となるのものがなかったためにリスト入りしなかった。白川・五箇山は、単に合掌造りの珍しさで選ばれたのではなく、「日本の農村集落」の代表として選出されていることを忘れてはいけない。また、富士山や伊勢神宮は、



【にこやかに熱弁をふるう西村教授】

日本古来の自然や文化を代表するものなのだが、条件が満たせずリスト入りできなかった。

現在は、日本各地の自治体が世界遺産推進室をつくり盛んに世界遺産リスト入りをアピールする時代となった。富士山も名乗りをあげており、ゴミ拾いやバイオトイレが完備し環境はよくなってきた。しかし、富士山は何の努力をしなくても人が集まるところであるがために山小屋の営業者にホスピタリティ（おもてなしの心）がないなど問題点が残る。

白川・五箇山には、世界遺産として多くの観光客が訪れる。そのお客様が何を求めてやってくるのかを見失わないようにしたい。寺院などの遺産はもともと人が集まることを前提に造られているため大きな問題はないのだが、集落を世界遺産にする難しさは、そこに住む人の生活があることである。しかし、だからこそ魅力があるともいえる。都会の人は癒しの空間を求めてくるのであり、それらのお客様を末永く引き寄せたいのであれば、癒しの景観と心の交流を維持しなければいけない。雪囲いを波トタンからオダレにかえる、休耕地や荒地をなくすなどできる方策はたくさんある。

万里の長城を1時間ほど奥へ歩くと観光用のゴンドラがあることがわかった。これを見た世界の観光客からEメールでユネスコに抗議の文と証拠写真が送られてくるのである。世界遺産には常に世界の目があるのだ。世界の人々が世界の宝に注目しているのだ。だからこそ、白川郷や五箇山の世界遺産に住む人々には、常に世界遺産を守る義務と責任があるという自覚と誇りを忘れないでがんばってほしい。そして、世界の宝物としての素晴らしさを世界に胸を張って発信してほしい。

パネルディスカッションで出された各地区の意見要旨

相倉史跡保存顕彰会・・・史跡から世界遺産登録への流れの中で合掌集落を守ってきた。現在の問題点としては、茅かきの人手不足があげられる。急斜面で足場が悪く、高齢化も進み運搬が大変である。また、茅を保管する場所も不足しており地元の茅を確保するためにも保管庫がほしい。生活面では、車庫が不足しており冬場の除雪車のさまたげになる。集落の南側に住民用の駐車場がほしい。

五箇山菅沼集落保存顕彰会・・・五箇山インターができてから観光客が増えてきた。高齢化が進み2軒の民宿も現在営業していない。田畑の管理に手がまわらず、家屋の管理や放水銃の管理、除雪が大変である。展望広場（仮称）の駐車利用に対して保存協力金を徴収予定だが、どれぐらいの料金に設定すればよいかを思案中。今後も、行政と住民が一体となって心からのおもてなしをしたい。

荻町の自然環境を守る会・・・昭和46年の住民憲章と守る会の設立、国の重要な建造物群の指定から世界遺産登録の流れのなかで、住民と行政が一体となり合掌集落と農山村の景観を守っている。文化財の景観保存と地域振興を目的にがんばってきたが、世界遺産登録による観光客の増大にともない、農地の景観保存、交通対策などが課題となっている。景観こそが観光資源であり、今後も住民の対話と理解協力を図り大事に守っていききたい。

（以上文責：和田正人）

守る会の活動指針（国際フォーラム白川郷宣言より）

- (1) 隣人にやさしい心豊かで安全な共同生活のいっそうの充実
- (2) かけがえのない美しい文化遺産の保全と未来への確かな継承
- (3) 国内外の人々との文化交流を通して友好の輪の拡大

= 12月の活動報告 =

- 12月 1日 交通対策委員会
- 12月 2日 三村交流会・シンポジウム
- 12月 12日 白川小郷土理解学習（会長）
役員会・12月定例会（14名）
- 12月 19日 中間会計監査
- 12月 24日 荻町区大寄り合い
- 12月 28日 岐阜経済大学地域連携推進センター
－ ヒヤリング（会長）

= 区民の皆様へ =

建物や土地などの現状を変更する場合は許可が必要です。必ず現状変更申請をして下さい。申請書は守る会定例会（毎月10日前後）の2週間前までに財団又は各組代表の委員に提出して下さい。このことは、遺産の保全と未来への継承のためとても重要なことです。皆さんの理解とご協力をお願いします。

1月の協議事項・・・今月は現状変更申請はありませんでした。